

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720214

研究課題名（和文）

日中異文化交流における葛藤発生メカニズムの解明と介入教育手法の開発

研究課題名（英文）

Elucidation of mechanisms that create conflicts in Japanese-Chinese intercultural exchanges and development of intervention methods for intercultural education

研究代表者

奥西 有理 (OKUNISHI YURI)

大阪大学・大学院工学研究科・講師

研究者番号：50448156

研究成果の概要（和文）：

本研究では、日中異文化接触における葛藤発生メカニズムを明らかにし、教育的アプローチによる葛藤解決手法を示すことを試みた。中国人ホスト、日本人ホスト、在日中国人留学生、及びニューカマーの中国人住民を対象として面接調査を行い、質的分析を実施したところ、「ルール依存」VS「人間関係依存」といった対比的価値観が葛藤原因となりうる可能性が示された。本研究の結果を基に、日本人向けの異文化間教育教材を作成した。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to elucidate mechanisms that create conflicts in intercultural exchanges between the Japanese and Chinese and identifies methods for solving them. The interviews for the study were conducted with Chinese hosts, students in Japan and Chinese residents who were newcomers. The qualitative analyses show that contrasting cultural values between the two, such as being “Rule dependent vs. Relationship dependent” could be possible causes of conflict. The educational material that has been developed is based on the results of this study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	376,793	113,037	489,830
2011 年度	223,207	66,963	290,170
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：異文化間心理学

科研費の分科・細目：外国語教育・異文化コミュニケーション

キーワード：異文化接触、異文化葛藤、中国人、日本人、異文化理解、異文化学習

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展に伴い日本社会にも多くの外国人を受け入れるようになった。多文化化する日本における外国人との異文化接触に関する研究は現在まで多く実施されてきたが、特定文化出身者と日本人との接触について取り上げ、その接触における葛藤発生の原因やメカニズム、葛藤解決手法について検討されることは少なかったといえる。

在日外国人として最多数を占め、今後も国際交流やビジネス、観光等多方面での異文化接触が予想される中国人との異文化接触は、日本人にとって最も身近な国際交流であるといえるが、一方で、対欧米人の場合のような確立された異文化接触や異文化葛藤の理論は未開発のままである。

日中の文化は、一般に文化的距離が近いと認識されるため、類似点が強調されやすく、差異の明確化による異文化理解は進んでいない。日中両文化の異文化接触によりどのような葛藤が生じ、どのようにすれば解決することができるのか、実証研究により葛藤発生原因やメカニズムの解明、コミュニケーションの効果的な図り方に関する知見が獲得されていけば、日中の異文化交流は容易なものとなり、人的交流による東アジアの平和的共存に貢献できるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、日中の文化差から生じる異文化葛藤の発生メカニズムを実証的に解明し、教育的手段による葛藤解決手法を提案することを目的とした。具体的には、以下の研究を実施した。

研究(1) 日本人ホストと中国人ゲストの異文化接触場面において、中国人ゲストが捉えた異文化性認知はどのようなものか解明する。

研究(2) 日本人ホストと中国人ゲストの異文化接触場面において、日本人ホストが捉えた異文化性認知はどのようなものか解明する。

研究(3) 在日中国人高度人材（元留学生就労者）は、日本文化適応をどのように成し遂げるのか、異文化理解と適応にまつわる心理的変遷と文化変容のプロセスを詳しく捉える。

研究(4) 日中の国際結婚家族を取り上げ、家庭というよりミクロな場における日中異文化葛藤はどのように生じ、解決されていくのかを解明する。

研究(5) 以上の研究から得られた知見を、日中カルチャーアシミレーター の形でまとめ、異文化間教育教材を作成する。

## 3. 研究の方法

本研究の上記(1)～(4)の目的を達成するために、以下の方法を採用した。

研究(1) 中国人留学生 8 名を対象として半構造化面接を行い、日本人との交流で驚いたことやギャップを感じたことなどについて聞き取った。質的分析(KJ法)を実施して構造を図式化してまとめた。

研究(2) 日本人ホスト 10 名を対象として半構造化面接を行い、中国人との交流で驚いたことやギャップを感じたことなどについて聞き取った。質的分析(KJ法)を実施して構造を図式化してまとめた。

研究(3) 日本の大学の大学院に留学した経験を持つ在日中国人就労者を対象として半構造化面接を行い、質的分析を行った。

研究(4) 中国人祖父母が育児滞在中に日本人母によって書き留められた日誌を、日中異文化葛藤の発生という視点から質的分析を行った。日誌の記載から、発生した葛藤や解決方法にまつわる概念を抽出して、登場人物別に時系列でまとめることで、それぞれの人物の葛藤発生から葛藤対処に至るまでの心理的変遷がわかるよう整理した。

研究(5) 研究(1)～研究(4)において抽出された日中の異文化葛藤事例を基にして、日常場面を取り扱ったストーリーを複数作成した。ストーリーは、日本人の登場人物が中国人の不可解な行動に困惑しているという内容、および中国人の登場人物が日本人の不可解な行動に困惑しているという内容で構成され、不可解に思われた中国人あるいは日本人の行動の背後にある中国人的価値観および日本人的価値観について、他の選択肢とともに選択肢の一つとして提示した。

#### 4. 研究成果

本研究の主な研究成果は以下の通りである。

研究(1) 中国人ゲストによる日本文化の異文化性認知は、「日本的コミュニケーション」「他人へのサービス」「希薄な人間関係」「礼儀正しさ」「上下関係」からなる、『日本人の人間関係』、「確認・報告」「集団主義的行動」からなる『集団主義』、「独自の文化」「生活環境の良さ」等からなる『特有の習慣・環境』、そして、「計画・形式重視」「ルールの支配」等からなる『ルール依存』という大きく4つに分類された。これらは、背後に対比的な中国文化的価値観があると考えられた。『ルール依存』については、人間関係を重視する『人間関係依存』という中国人の価値観が浮かび上がった。互いの文化的価値観が異質であり、両者が相容れない場合、どのようにして折り合いが付けられていくのかについての解明が課題であると考えられた。

研究(2) 日本人ホストによる中国文化の異文化性認知は、①「大陸的」、「人間関係依存」「伝統的マナー・習慣」「自己主張の強さ」からなる『伝統的な中国文化』、②「女性の強さ」からなる共産党政権や文化大革命の影響を受けたと考えられる『近代的な中国文化』、③「物質主義」「上昇志向」からなる経済成長著しく急速に発展した中国の社会事情の影響を受けたと考えられる『現代中国文化』という、3種類に分類された。日本人ホストの認知は捉え方の多くが、否定的な評価を伴っていたが、食文化などの目に見える生活文化については、単純な「違い」として受け止められていた。一方で、日本人と本質的に異なる人間関係の持ち方に関しては、“一人では何もできない”と、“独立心の欠如”という否定的評価がされており、大陸的な性質に関しても、“いい加減で困る”という否定的評価が付与されていた。単なる習慣の違いという以上の、コミュニケーションや価値観に関わる文化について、否定的な評価が下されて誤解が生じやすいものと考えられた。

否定的な評価が付与された理由として、日本人が元々文化的に好まない性格が認知されたからである可能性が考えられる。例えば、本研究で抽出された中国人留学生の自己主張の強さや、人間関係依存などの特徴は、日本人にとって、傲慢、強要的、あるいはゴマをすっているように見えてしまった可能性もあろう。自らの文化的価値観と相容れない他文化の文化的特徴に対して抱いた嫌悪感をどのように解消していけるかについては、

今後の検討課題としたい。

研究(3) 在日中国人の中でも高度人材と考えられる、大学院レベルの日本留学と就労を経験したインフォーマントの日本文化適応について調査した結果、両文化間の矛盾や葛藤について、「日中文化の相対的理解」という段階を経て、最終的には「中国人的行動の抑制」、「日本人の行動の積極的取り入れ」、「違いをありのままに受け入れて併存」といった方法で調整していることが分かった。また、「日中文化の相対的理解」という段階に至るまでには、「観察」「体験学習」「理論学習」のいずれか、あるいは複数の学習の組み合わせが並行して行われていた。

また、中国社会における地位や中国社会に対する姿勢や考え方が、適応の質を左右する要因となりうることが示唆された。すなわち、中国に滞在時の社会的地位が高く、社会的融和を保っていた場合は、両文化並立的な異文化適応に進みやすいが、中国における社会的地位の確立がなされていなかったり、中国社会に対する不満や不利益感情を持っているような場合は、日本という社会システムのより確立した社会に暮らす現実的メリットが見出されやすく、日本文化との葛藤という事実は意識化されるも排除されて、サバイバル・レベルの適応が進んでいく可能性があることが明らかになった。このタイプの日本適応は、日本社会や日本人に対する深い関与や理解を促すというよりも、生存に必要な範囲の合理的な適応を起こしているのではないかと考えられた。中国人の中国社会に対する認知と日本社会への適応の関係に関して具体的内容が明らかになったことは、本研究の貴重な成果であるといえよう。将来的には、より多くのインフォーマントを対象としてこの点をより深く探索し、知見の理論化へと繋げていきたい。

研究(4) 日中国際結婚家庭における家庭内異文化葛藤について、インフォーマントによって記された日誌の質的分析を行った結果、①食生活、②親孝行、③子どもの服装、④愛国・愛郷心の4事例をめぐり葛藤が頻繁に発生していたことが明らかとなった。このうち「食文化」の事例については、家庭内の継続的な接触と偶発的な出来事から収束が生じて日中両文化の理解に至っていたが、その他の事例については、「回避」や「距離の確保」などの葛藤解決を志向しない対処方法が選択されがちであることが明らかとなった。本研究からは、日本人と中国人の現実的な関係性の構築に関して、今後の日中異文化研究の展開の足掛かりとなる、有意義な結果を得ることができた。

研究(5) 作成されたカルチャーアシミレーターを用いると、日中の異文化理解に関してどのような教育的効果があるのかについて、今回の研究期間では実施するに至っていない。引き続き、カルチャーアシミレーターの内容を精査しつつ、教育教材としての質を高めて、日本人および中国人に対して異文化間教育のセミナーを実施することにより、教育的効果を検証していきたい。

## 5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 奥西有理、中国人留学生との対人交流における日本人ホストの異文化性認知、留学生教育、第17号、(2012)、99-105.
- ② 奥西有理、田中共子、中国人ホストにおける日本人留学生との異文化接触：AUC-GS学習モデルに基づく異文化への認知と対応の整理、岡山大学社会文化科学研究科紀要、第30号、(2010)、65-79.

## 〔学会発表〕(計4件)

- ① 奥西有理、田中共子、中国人祖父母の育児滞在をめぐる日中異文化葛藤と心理的変容：国際家族の家庭内規範に関する微視的分析、多文化関係学会第11回大会、2012.10.21、関西学院大学
- ② 奥西有理、中国系ニューカマーの留学と就労体験を通じた心理的葛藤と行動変容：日中文化差の調整過程をめぐる分析、異文化間教育学会第33回大会、2012.6.10、立命館アジア太平洋学会
- ③ 奥西有理、日本人ホストと中国人ゲストは異文化接触をどのように受け止めたか日本質的心理学会第8回大会準備委員会企画シンポジウム：文化の生成と変容の最前線、2011.11.27、安田女子大学
- ④ 奥西有理、中国人留学生の日本文化取り入れ行為における文化的気づきを異文化変容、日本質的心理学会第8回大会、2011.11.26、安田女子大学

## 〔図書〕(計0件)

## 〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

## 〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奥西 有理 (OKUNISHI YURI)  
大阪大学・大学院工学研究科・講師  
研究者番号：50448156